

# 木下川の子ども



1 9 5 7 年 度

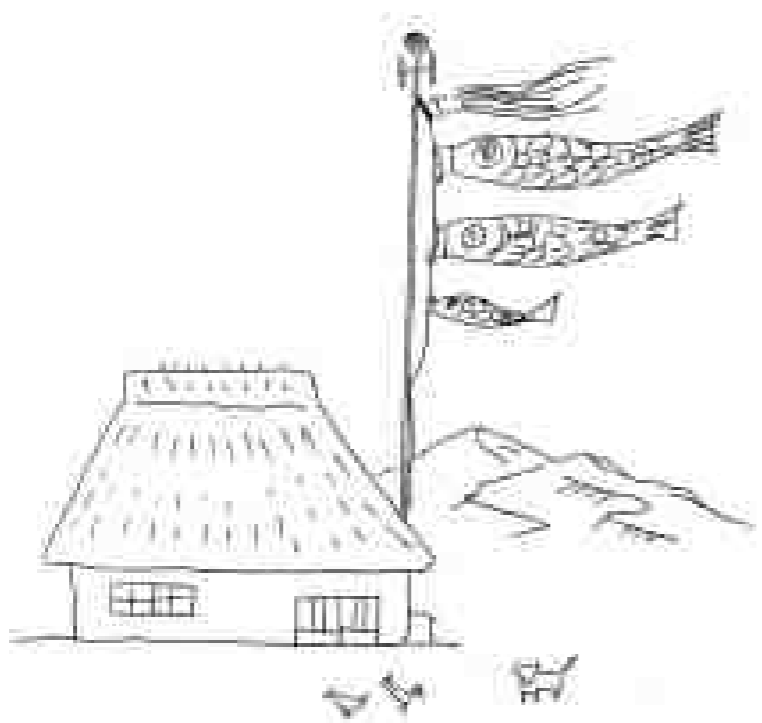
~

2 0 0 2 年 度

4年

注意をしよう

ぼくらの桑原くんは。いたずらなので、し  
ようがない。ぼくもそうだった。ぼくらのわ  
るいことがわかった。だから桑原くんに一度  
注意した。でも一度はだめだった。ぼくらは  
どうにかして、いい人にしてやろうと思って  
二度目は、ふじいくんがなかされるからとめ  
た。でもなかなかやめない。どうやってとめ  
ようかと、かんがえた。またとめたら、やっ  
とやめた。けんかになりそうだった。でも桑  
原くんは、おこった。でもぼくと細井くんと  
小川くんと、いしずかくんも注意したら、桑  
原くんが自分の、わ  
るいことをしたのが、  
わかったらしい。ち  
やんとやると、やく  
そくした。それで、  
なかよしになった。



一九五八（昭和33）年度

ストーブ

あたたかいストーブ 長いエントツ

まわりでみんなあたって

話してる 笑ってる

だれかさんが横むいておこっている

おけの水がもうもうとへやいっぱいにたち

こめる

火はパチパチなっている

みんなのかおがりんごのように

赤くなっている

私の顔も、足までも、お正月にたべた

たこのように、赤くなった

一九五九（昭和34）年度

運動会

運動会の、朝、私は、六時四十分ごろ、目がさめました。まだ、七時前なので、花火はなっていないませんでした。私は、すぐまどを、あけて見ました。夕べと反対に、空はどんよ

りくもっていました。「もう七時というのに、花火は、ならない。」私は、しんぱいになって、きました。とにかく、起きようと、思っただけで、目が覚めると、「ドン」。ともものすごい音がしました。私は、「あ、花火だ。」と思いました。つづいて、二つ三つになりました。私はきゆうに、明るくなったようなきがしました。いそいで、したくをしていたら友だちの、西村さんたちがむかいにきたのでいっしょに、学校へ行きました。行ってみるとたくさんの、友だちが来ていました。「おはよう！おはよう。」みんなあかるく、はしゃいでいました。「みんなせきにつくように。」と、丸橋先生が、マイクで伝えましたので、私たちはめいめい自分のせきにつきました。このころになるとくもっていた空も、晴れてきました。やがてかいかいしきが始まり、日の丸のはたが、あがつて行くとき私は、「晴れてよかったな。」と思いました。かいかいしきが終り、運動会

の歌を、うたってラジオ体そうをやりました。それも終わると、一番最初私たち四年生の、徒競走です。私たちは、うら庭にあつまって、四人ずつ一組になってならびました。前の方の組が、つぎからつぎへと走って、行きました。私はむねがどきどきしてきました。みんなそうだろうと思って、となりの人の顔をみました。しかし平気な顔をしているので、私は、ますますどきどきしてきました。いよいよ私たちの番です。「いちについて」、四人がおなじせんの上にならびました。「よーい、」私は前の方を見た。「ドン」と、音が聞こえたような聞えないような、私はいちもくさんに、走りました。どんどん白いテープが、近付いてきた。私の前にはだれも走っていない。ついにテープが胸にきた時私はほっとした。一等だった。胸はやはりどきどきしていたが走る前のどきどきとは、ちがっていた。うしろの方をふりかえって見た。私のあとから、走る人たちが、やはり私とおなじよ

うにどきどきしているところ、思いながら自分のせきに行きました。

一九六〇（昭和35）年度

校長先生

校長先生は、ひまがあるからいいなあ  
いつもいすにすわって運動場を見ている  
ぼくたちだけ勉強させて自分だけ勉強しない  
たまには、便所にいつている。

校長先生は

月曜日には長い話ばかりする

もう夏だから

校長先生の話がなければいいのにな

校長先生の頭はちよつと

はげているから

暑くないと思つた。

一九六一（昭和36）年度

おもちつき

十二月二十八日、うちでおもちをついた。

はじめはしんせきのおじさんがついて、おばあちゃんががてがえしをした。おじさんはうつつたんに「ほいー」とかけ声を出した。やつと一うすつきあがると、おばあちゃんがそのあついおもちを台の上に置いた。わたしがさわったらとてもあつかった。しばらくしてさめたので長くのばしてほかの台の上に着した。うつつした。こんどはかわって、おとうさんがついて、おcaaさんががてがいしをした。つきあがるとおcaaさんもおばあちゃんのようにしておもちを台の上に置いた。おばあちゃんがわたしとおcaaさん、明子ちゃんに、みえ子ちゃんに小さくちぎってみんなにくるみだんごをつくってくれた。とてもおいしかった。おcaaさんが、

「のり子、ばあちゃんの家にもって行って」といったのでわたしは

「いいよ、明子ちゃんといくよ」といったら

おcaaさんは

「じゃ、二人で早くいってきて」といったのでわたしと明子ちゃんと二人でばあちゃんの家におもちをもつていった。しばらくしてわたしたちがかえってくるとおかあさんたちはもうあとかたづけをしていた。おかあさんはそこらをかたづけながら、「これでお正月のよういもできたしはやく正月がこないかね。」と言った。となりの家ではまだおもちをつくいせいもいい声がきこえていました。

一九六二（昭和37）年度

読書感想文「からすと水がめ」

のどをからからにしたからすがいた。わたしは、かわいそうだなあと思った。からすは、水がめを見つけた。からすはどんなによろこんだことだろう。わたしは、からすのきもちがよくわかる。からすは、水がめに近づいた。中をのぞいて、くちばしで水を飲もうとしたら、口ばしがとどかない。



からすは、きつとこまっただらう。わたし  
もこまっってしまった。せっかくみつけた水に口  
がつけられないなんて。からすはいろいろ考  
えたすえ、石をもってきてかめの中に落とし  
た。そして、何回もいれているうちに、から  
すの口ばしにとどく所へ来た。からすは、又  
どんなに喜んだかしのれない。からすは、口ば  
しがとどかなくなると、又、石をいれた。か  
らすは、とてもかしこい鳥だと思った。そし  
てからすは、水がめの水をぜんぶのんでから、  
元気よく旅に出た。からすは、又こまったこ  
とがおきるだらうと、わたしは思った。わた  
しがからすの友だちだったら、そうだんにの  
ってあげる。でもからすが、水をのめてよか  
った。わたしもあんしんした。からすもよか  
ったと思っただらう。

星

一九六三（昭和38）年度

きらきら光る星

夜空にきらめく星

星は私を見ている。

きれいな夜空から

星はきれいでやさしそうだ

私は星になってなにもかもわすれて

光ってみたい

きれいなよぞらで光ってみたい

一九六四（昭和39）年度

えがお

えがおになったおかあさん

おとうさん、わたし、おにいさん

おとうさんが

えがおになると

おかあさんが

えがおになる

おにいさんが

えがおになると

わたしがえがおになる

みんな、えがおになれば

家の中もえがおになる  
テレビもおちやわんも  
みんなえがお  
それがわたしの  
一ばんたいせつなもの

一九六五（昭和40）年度

わたしのお母さんは、おこると、とてもこ  
わい。だからわたしと、いもうとと、けんか  
してお母さんが「やめなさい」と、言うと、  
わたしたちは、すぐにやめる。またやさしい  
時は、すぐやさしい。わたしは、時々いつ  
もこんなにやさしかったらなあと思う。お母  
さんは、料理がうまい。わたしはお母さんの  
作る料理は、大好きだ。お母さんは、日曜日  
のほかは、毎日働いている。わたしは、すこ  
しさびしいけど、たいへんだなあと思う。  
会社から帰ってくると、すぐ夕はんのしたく、  
こんな毎日をおくっけていても、お母さんは、  
病気をしない。たまに頭がいたくなるくらい

だ。わたしは、お母さんを大切にしなくちゃいけないと思う。お母さんは、わたしが病気になるのと心配してよくかんびょうをしてくれる。そしてなんでも買ってくれる。わたしはちよつとへんな気がする。でも心配して、かんびょうをしてくれると、とてもうれしい。そしてとてもしあわせだと思う。お母さんは、時々わたしのことを「のろま」と言う。わたしは、すこしのろまだけどそんな事を言われると急に、お母さんが、にくらしくなっていく。でもほんとうは、きっと心の中では、大すきだと言っているのかもしれない。よその家に行つてへんな事をするとかへ帰つて来ておこる。わたしは、お母さんが、小さい子どものは、どんなだったんだらうと思う。お母さんは、わたしのために、おこっているんだと言う。よく考えてみるとそのとおりだと思う。時々、勉強の事をきくお母さんは、「しつかりしなくちゃだめよ。」と言う。お母さんがこう言うのと、なんだか勉強するきにな

ってくる。わたしは、お母さんが、まほう使  
いなのかしらと思う。そしてわたしはこんな  
いいお母さんをもってしあわせだなあと思っ  
た。

一九六六（昭和41）年度

### 母の日のこと

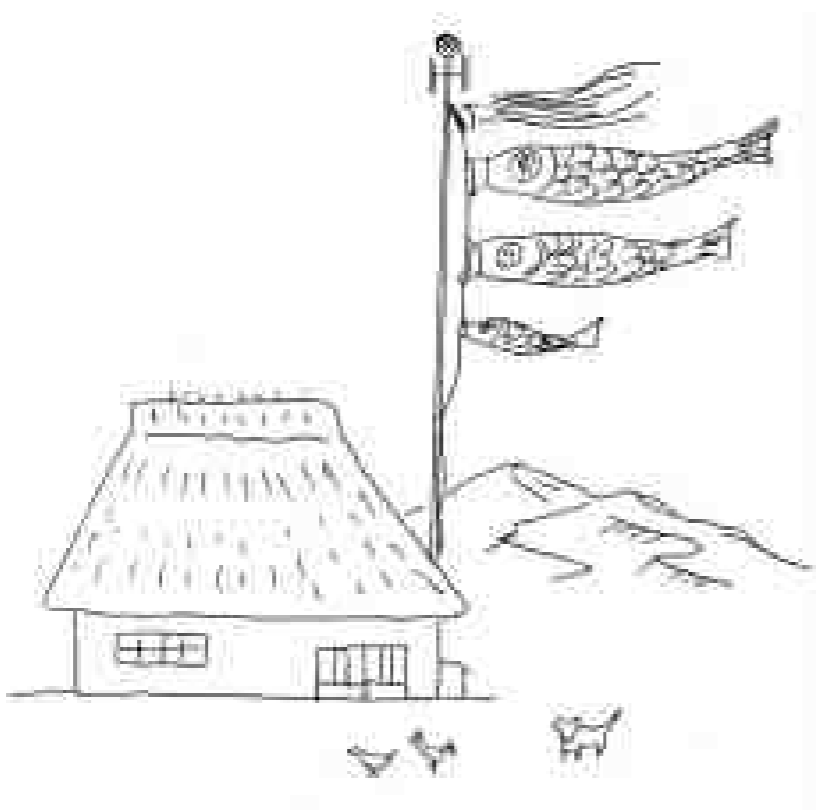
私は一年生の時から母の日には、わすれな  
いで、プレゼントを、あげています。

一年生の時は、カーネーション二本しか、  
買いませんでした。でも、いくらすばらしい  
物でも、心のこもったおくりものには、かな  
わないと思いました。ところが花やおじさ  
んが、「かんしんだから、おまけしてあげよ  
うね。」と行って、おまけしてくれました。そ  
の時は、とてもよろこんでくれました。私  
二年生の時は、ソックスをあげました。私  
は、あまりいいのがなかったもので、いろ  
なみせを見つげに行きました。そして、やっ  
とお母さんがよろこんでくれるような品物が、

ありました。そして、お母さんにプレゼントをする時はちょうど出かける時だったので、私がプレゼントするソックスをはいていきました。なんだか私の気もちは、はずかしいようなうれしいような気もちになりました。

三年生の時は、大塚さんといっしょにかいに行きました。お母さんによるこんでもらえるものといってもよくわからないし、とてもまよいました。しばらく大塚さんと、相談して、やっときまりました。母の日のプレゼントは、エプロンはおそろいで、シームレスはすこしちがいます。その時はすこし早い母の日でした。

今年の母の日のプレゼントは、まだきまっています。今年は今までよりも、心のこもったおくりものをしたいと思います。



一九六七（昭和42）年度

## 家族のくせ

ぼくの家族は、ひとりひとり、くせがあり  
ます。まず、おかあさんのくせは、テレビの  
時代物を、見ると、すぐなみだを、ながすこ  
とです。おかあさんは、長谷川一夫の、フア  
ンなので、長谷川一夫の、時代物は、いつも  
見ています。ぼくは、おかあさんが、ハンカ  
チで目を、ふいている時、  
「ばかみたい」と、いいます。

つぎは、おとうさんです。おとうさんのく  
せは、ものわすれを、することです。自動車  
へ、のる時になるといつも、  
「キーはどこだあー」と、どなります。する  
と、おかあさんが、  
「自動車に、ついてます。」と、いいます。そ  
うすると、おとうさんは、笑いながら、車の  
所へかけていきます。  
そのつぎは、一番上の、おねえちゃんです。  
おねえちゃんの、くせは、はがつよいので、

なんでも、はできってしまうことです。とくに、きるのはわゴムです。それで、おかあさんに、いつもおこられます。おねえちゃんは、おこられると、その日は、ぜんぜん口を、きかないで、おこっています。

つぎは、二番目の、おねえちゃんです。二番目のおねえちゃんの、くせははなをきにすることです。いつも

「はなが、きもちわるい。」と、どなっています。ぼくは、いつも、およめにいったら、おねえちゃんどうするんだらうなと思います。

さいごは、ぼくのくせです。ぼくのくせは、がんめんしんけいというみたいなことを、やることです。すると、おとうさんが、「いまに、ぶたみたいな顔になっちゃうぞ。」といいます。ぼくと、おねえちゃんたちはいつもおかあさんに注意されていますが、ぜんぜんなおりません。家の家族は、いろいろなくせがあるので、とてもおもしろいとおもいます。



一九六八（昭和43）年度

ぼくの一生

一才、泣いてばかりいた。

五才、ぼくは、ようち園には行って、あそんでばかりいた。

七才、ぼくは、学校に、は行って、べんきようした。

十才、べんきようを、なまけて、いたずらばかりしていた。

十二才、小学校の、六年生に、なって下きゆう生のせわをして、いそがしくなった。

十六才、にきびができて、気にしてばかりいる。

二十才、ぼうえき会社の、しゆうしよくしけん、合かくして、ぼうえき会社に、はいる。そしてお見合をするが、しっぱいする。

二十四才、出世して、か長になる。  
二十五才、けっこんする。こう外に、じゆうたくをたててすむ。

二十八才、子どもが、うまれる。

三十三才、また子どもが、うまれる。  
三十八才、四人で、九州を、りよ行する。  
かえりの、汽車ちゃんが、なくなる。  
三十九才、はじめて、ふうふげんかをする。  
そして、大けがをして入院する。  
四十三才、出世して、ぶ長になる。  
四十六才、夜おそく、うら口から、家に、  
はいつて、どろぼうと、まちがわれ、子ども  
に、バットでぶたれる。まったくついていな  
い。  
五十四才、しわが、たくさんせんろのよう  
にふえる。  
六十才、子どもたちは、大学を出て、けっ  
こんする。  
六十四才、ついに社長になる。そして、し  
ゆうぎいんに、立こうほするが、らくせんす  
る。こんどは、県会ぎいんに、立こうほした  
が、また、らくせんする。こんどは、市会ぎ  
いんに、立こうほしたが、またまた、らくせ  
んする。

六十九才、しわが、ますますふえる。  
七十二才、会社を、やめる。そして、びよ  
うきになり、ねてばかりいる。  
七十九才、つえを、もって、あるくように  
なる。  
八十才、めがねを、つけるようになる。  
そしてだんだんやせてくる。  
八十四才、食よくが、なくなり、一日一食  
ぐらいしか、たべなくなるようになる。  
そこで、ぼくの八十四年の一生がおわる。

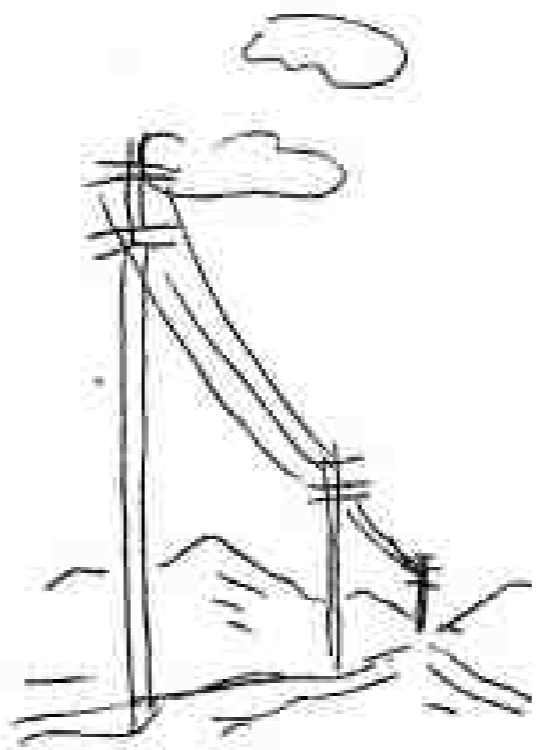
一九六九（昭和44）年度

### スキー

わたしは、この間の土曜日、スキーに行き  
ました。ほんとうはお母さんも行くはずでし  
たが風をひいておにいさんとお父さんと三人  
で行きました。上野駅から湯沢まで電車で二  
時間半ぐらいで着きました。駅からりよかん  
まで二十分ぐらいでした。りよかんに着いて  
荷物を置いてからスキー場に行きました。わ  
たしは、その日初めてなので、お父さんにひ

っぱってもらいました。わたしはころんでは  
かりいりましたが、おもしろくてなかなかりよ  
かんにもどりませんでした。おにいさんはす  
べれるのでリフトで高い所からすべったりし  
ていました。わたしとお父さんはくらくなっ  
たのでりよかんにもどりました。お父さんと  
へやでランプをしていると、おにいさんが  
帰ってきたのでしよくじに下に行きました。  
その次の日朝のしよくじが終ると、すぐスキ  
ー場に行きました。その日はお父さんもいっ  
しよにすべりました。お父さんは、うまい人  
に曲り方やすべり方をおしえてもらっていま  
した。わたしもすべってみたら横にたおれて  
しまったので  
「お父さん」  
と大声でよんだらわらいながら  
「うまい、うまい」  
と喋ってくれました。そばにいた子供は、お  
父さんといっしよにたのしそうに遊んでいま  
した。二時半ごろりよかんを出るといので

二時ごろへやにもどってしたくをしました。  
二時半ごろりよかんを出て三時ごろホームに  
着きました。電車が動き始めて少したつとト  
ランプをしました。そのうちに上野駅に着き  
ました。



一九七〇（昭和45）年度

かまくら

今日朝おきて外を見ると雪がいつぱいも  
っていたのでびっくりした。おおいそぎで  
はんをたべてかげちゃんとスコップをもつて  
山にかまくらをつくりにいきました。  
ぼくは、スコップでえんをかいてからかげち  
やんといっしよにまわりにある雪をかたっぱ  
しからしやくつてえんの中に入れてました。し  
やくつているうちにだんだんつかれてきたの

でかげちゃんに「いくらやってもつかれるばかりだからやめようよ。」といいました。かげちゃんは「雪だるまをつくってえんの中におこうよ、そうすればあんまりつかれなくてすむよ。」といいました。ぼくとかげちゃんはすぐ雪だるまをつくりはじめました。つくった雪だるまをえんの中にいれただけいぶん大きくなつたのもう一こ雪だるまをつくってかからスコップでくわいてそのかけらをすきまのところにつめてからスコップでたたいてその上にやわらかい雪をかぶせました。かぶせおわつた時おかあさんがごはんだからかえってきなさいとだったので家にかえりました。ぼくは、みんなよりさきにごはんをたべてスコップをもつてまた山にいきました。ぼくはどんだん雪をかぶせかげちゃんのくるころ、はいり口のあなをほっていました。あながせまいのでいり口をひろげました。それでもぼくが大きいのでかげちゃんにたのみました。かげちゃんはかまくらの中にかざるものを

つくっていました。とうとうかまくらができ  
ました。でも屋根がひくいのでほった雪を上  
にかぶせてたかくしてからてんじようをほり  
ました。雪をのつけた時、てんじようががく  
つとさがったので下でかげちゃんにおさえ  
いてもらいました。かげちゃんもかざりがで  
きたのでかまくらの中にかざってふたりでは  
いりました。ぜんぜんさむくもないしいき  
もちでした。

一九七一（昭和46）年度

るす

暗くなってから家にかえった。  
家には、誰もいなかった。  
しんとして、となりのテレビが  
かすかにきこえる。  
豆でんきゆうのあかっぱい光が  
へやの中をてらしている。  
かべにせんたくもののかげとたんすのかげ  
が

おばけみたくうつつている。

こわい

あわてて、テレビとでんきをつけた。  
早くおとうさんかえってこないかな。

一九七二（昭和47）年度

0点

ぼくは算数のテストで、0点をとってしまいました。  
この間おかあさんに、「おまえは遊びにぼけすぎだ。」と言われたばかりだった。  
ので、どうしたらいいのかこまってしまいました。  
した。

ぼくはそのテストを小さくたたんでかばんの中に入れて家に帰りました。  
そうして、机の一ばんおくにそつとかくしておこうと思いましたが。  
ました。ちょうどその時、池田君が遊びにさそいに来ました。  
ぼくはもう遊びのほうに気を取られて、テストのことを、わすれてしまいました。  
しました。



ところがきのうの夜、ぼくのへやをかたづけているおかあさんにそのテストをみつけられてしまいました。ぼくは、「あっいけな  
い。」と思いました。おかあさんはすごくおこ  
りました。そうしておとうさんが、こしにし  
ているおきゆうを持ってきてぼくの頭と足の  
うらにおきゆうを持ってきてぼくの頭と足の  
うらにおきゆうをするといつてこわい顔をし  
ました。ぼくは、家の中をにげまわりました。  
それでもおかあさんはゆるしてくれませ  
ん。ぼくはこわくなりとうとう泣き出してしま  
いました。

その時、おにいちゃんとおねえちゃんが来  
て助すけてくれました。でもおにいちゃん  
は、わらいながら、「そのもぐさじやちよつと大  
きすぎるから半分にしてやれ。」と言って大き  
な声でわらいました。でもぼくはうれしかつ  
たのです。

それからおにいちゃんに算数のテストを教  
えてもらってなおしました。おかあさんは、

「こんど0点を取ってきたら本当に大きなはげを作るぞ。」といたしました。

「ああこわかった。」ぼくは、こんどからちやんと勉強をするやくそくをしました。

一九七四（昭和49）年度

### 弟の風邪

風の強い日に、弟が外で遊んでいたので、私が「家の中へ入りなさい。」と言ったら「嫌だよ。」と言ってなかなか家の中に入ってこなかった。夕方、弟が、すこしへんなので体温計で、はかってみたら三十八度あったから、母が、「平野病院へ行きましょう」と言ったら弟は「やだ。」と言って、言うことをききませんでした。やっと弟は「じゃあ本かっしてくれたりはいくよ。」と言って行きました。病院へ行ってから、体温計ではかいたら、三十八度二分でした。それからしばらくして、名前をよばれたので、しんさつ室へ入っていき

ました。先生が「へんとうせんです。」と言ひ、  
そして注射をしたら、弟はすこしべそをかいて  
いました。が、「ぼくはなかないんだ。」と言  
つてがまんをしていました。病院を出てから、  
弟は私に「おねえちゃん本をかってくれるん  
でしよう。」と言つて本屋へいきました。本を  
かってあげて家へかえりました。  
家へ帰つてから弟はねつがあるから私が氷  
まくらを作つて、本を読んであげてねかして  
やりました。

朝おきて母たちのへやへいつてみたとき弟  
の顔色がわるかった。すこし、ねつもありま  
した。

学校からかえつてから、弟はよこになつて  
いたので、そばで本を読んであげました。す  
こしたつてから、弟の人形で遊んであげまし  
た。

夕方、すこしよくなつたようでした。体温  
計ではかつてみたら三十六度に下がつていま  
した。そして、ねかしてから、私もすこし風

邪をひいていました。

朝、おきたとき顔色もよくなっていました。  
私は「なおってよかったね。」と言ったら弟は  
「うんやっとなおったよ。」と言いました。

一九七五（昭和50）年度

一月一日（木）晴れ

今日は元旦、年の初めです。初日の出を見  
ようとしたりたけれど、ねぼうをしたからみられ  
ませんでした。でも、きれいだったそうです。  
朝ごはんには、おぞうにを食べました。と  
てもおいしかったです。朝ごはんを食べおわ  
ったら、妹や弟とすご六や福わらいを、して  
遊びました。私が負けてばつかりいました。  
おばあちゃんから、お年玉を千円もらいま  
した。今年もいい年になりそうです。

一九七六（昭和51）年度

二月二日（水）晴れ

学級会で、私たちの班のことが出された。  
班長の三好君が出したのだ。「女の子のことばかり言うが男の子もふざけたじゃない」と、文句を言いたい。私たち女の子も、悪かったけど、男の子はその倍もふざけたのに……。  
男の子も、女の子と同じように見てもらいたい。

一九七七（昭和52）年度

十月二十一日

おふろにはいった。よう服をぬいで、足をさきにちよんといれたら、すごくあつかった。このぶんじやなかなかはいれないと、思った。でも寒いからがまんしてはいった。やっとはいった。もうあんしんだ。

一九七八（昭和53）年度

一月二十二日（月）

先生がけっこんして、はじめて学校に来る

日だ。私たちは土曜日から、けいかくをたてて、クラッカーをもってきた。さて、ちよろれいがおわって先生がくる時間だ。先生がきた！みんながはくしゆをして

「しんこんさんいらっしやい。」

先生は、ケラケラ、みんなもケラケラわらわらってしまった。わらっていた時、大武さんがクラッカーをならした。それから話がはじまった。先生はしきりに、

「グリーン車で行ったぞ。」

と、いつていた。でも私は、グリーン車くらいで、えらいとは思わないよ。

一九七九（昭和54）年度

二月二十二日

学級へいさの二日目、とうとうがまんがで  
きず木下川生協でインベーターをやっていた  
ら小笠原先生が来た。ぼくは胸がドキンとし  
た。小笠原先生は「克也、さん歩しないか。」

と言った。ぼくは「うん」と言っ  
て先生とい  
つしよに外へ出た。最初に明治公園へ行  
つて、  
中川に出て、水門をぐるつとまわつて、  
西八  
公園へ行ってから学校にもどつた。四  
時半ご  
ろ、木下川生協に加藤先生が来た。やば  
いと  
思っているうちに、加藤先生が入つて  
来た。  
「こらッ、早く帰れ」とおこられた。

一九八〇（昭和五五）年度

十一月二十三日

お父さんが急にヘルニアという病  
気になり  
ました。足もあげられないほどいた  
そう  
でした。私はくつ下をぬがせてあげ  
たり、  
上衣を  
ぬがせてあげたりしました。お父  
さん  
はよろ  
こんで「どうも、ありがとうよ」と  
い  
つて  
く  
れました。お父さんはごはんもたべ  
ない  
でそ  
のよる「いたんでねむれなかつた」と  
い  
つ  
て  
いま  
し  
た。お母さんは足をもんであげたり  
ク

スリをぬってあげたりしました。わたしはな  
んで急にあんな病気になったのかと思って心  
配でした。早くなおしてもらいたいです。

一九八一（昭和56）年度

わたしのように

私は、手うちそば屋さんになりたいです。

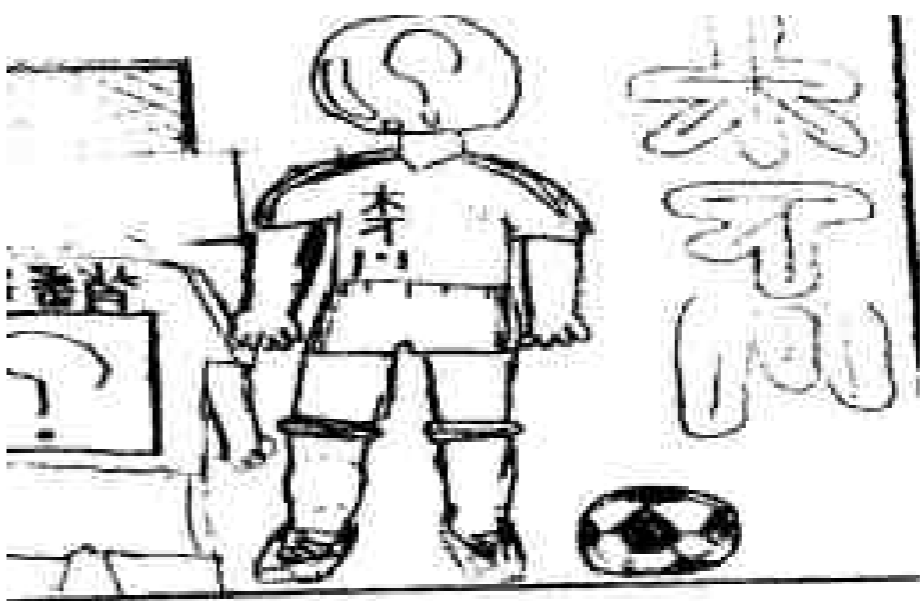
それは、毎日毎日こなをねってると、とても  
たのしいからです。どうしてかというところ、お  
そば屋さんの前で男の人がこなをねっている  
のを見て、感動したからです。

人が、いっしょけんめいドンドンと、う  
っているのが、おもしろいです。私は、さい  
しょねんどみたいなのが、どうして何十本  
も何十本も細い糸のようになっていくのがふ  
しぎです。

私は、中学を卒業したら調理学校に入って、  
そこを卒業したら、小さくてもいいから、手  
うちそば屋さんになっっているいろいろな物をお客



さんに食べてもらって、お客さんによるこんでもらいたいです。そして、できたら私が毎日毎日そばを、作る人になりたいです。でも私は、ま



一九八二（昭和57）年度

八月八日（日）

朝、五時におきてきさらづの海へ、しおひがりにいきました。うみの家という所でつたあさりを入れるあみとくまでをかしてくれました。そして、水着にきがえてはだしでうみに入りました。お父さんたちは、ビーチサンダルをはいていました。私は、はだしなので海におちて入る石の上を歩くといたくてたまらないからビーチサンダルをはいてあさり

とりはじめました。私の家ぞくは、五人かぞ  
くだけどくまでは三つしかありませんでした。  
だから私は手であさりをとりました。少しほ  
るとあさりがどんどんとれました。いつまで  
もとれるのでおねえちゃんとお母さんに手つ  
だってもらいました。三人でとつたらすぐと  
れなくなりました。とつたあさりをあみの中  
へ入れてから、また、あさりをとりました。  
たまに小さいあさりがとれました。だけど大  
きいのが多かったです。うみの家で氷をたべ  
てから、またあさりをとりました。いっぱい  
とれました。とつても、たのしかったです。

1 1 月 6 日（日）

一九八三（昭和五八）年度

ソロバンがあったから6時にサッカーに行  
きました。行ったらゲームでした。ぼくが行  
くまで、1対1でした。ぼくが、キーパーを  
やって河端くんにいれられて、2対1。そし  
て、うだ君とぼくがこうたいして、中1のけ

んじ君がキーパーだったので、なかなかいれられませんでした。そして、青せんからとびだしてきたので、ぼくがロングシュートをいれて、2対2。また、けんじ君が、青せんからとびだしてきてきたので、ぼくは、ゴールポストをねらえばいいと思いました。そうしたら、みごとせいこうして、3対2になって、ぎゃくてんがちしました。

一九八四（昭和59）年度

二月二日（土）

今日、学校で豆まきをやった。豆まきでおにがいなので、市田和成君のバラモンスタ―のマスクを自分でかぶっていました。しかしマスクは、頭がはげていて顔がしわくちやで赤い顔でかっこいいマスクじゃありませんでした。中村君がかぶっていたドラキュラのマスクよりかっこわるかったのでしょうがないマスクだなーと思いました。そうしたら

みんなはぼくの所ばかりで中村君の所はあてられないから、いいなあーと思いました。そして先生まで豆をあててきたのでぼくはおこってマスクをかぶったままみんなの所に豆をあてにいきました。けれどぎやくに女の子達に豆をあてられてなんで女の子がこんなに強いのかなーと思ったけれどそんなことはききしないで食べる豆をもらいました。

一九八五（昭和60）年度

十二月二十一日（土）

今日、8時ごろ、ダックがいなくなっ  
てしまいました。お父さんが、おみせのシヤッタ  
ーをしめようと思いました。そしたら、おばあ  
ちゃんが、  
「おみせをしめる前に、バイクしまっ  
ちやえ  
ば。」

と、言ったら、お父さんは、  
「うん。」

と、いいました。

そのすきに、ダックがにげてしまいました。  
そして、お父さんはびっくりしておいかけま  
した。でも、ダックは見つかりませんでした。  
ダックが、いつもいなくなるときは、さいし  
よの1時間ぐらいは、  
「ダック―。」

と、さがすんだけど、もう、あきらめてしま  
うのです。そして、みんながわすれたころに、  
家の前でキャンキャンんでいるのです。

一九八六（昭和61）年度

十二月六日（土）

ぼくは、もちつき大会に出ようと思ったら、  
先日かぜをひいてしまいました。それで家で  
ねていました。家でおもちの事ばかり考えて  
いました。― おもちが食べたいなあ。しよ  
うゆ味、大根としょうゆのやつ。きなことか  
― おいしそうなものばかりです。思いうか  
べるだけでよだれが出てきそうです。でもあ  
とで家で作るあげもちはとてもおいしい。今

も食べたい。もちつき大会の後で出た万頭は大きらい。だから妹にあげました。それで、いけないぼくは、ねながら、テレビを見ながら、みそラーメンを食べていました。本当にざんねんでした。来年もさ来年も卒業するまで、ずっとやりたいです。

一九八七（昭和62）年度

一月二十三日（土）

前の学校で、わたしは計算ができませんでした。2年生になって、かけ算がすごくできませんでした。3年の2学期に、友だちがひっこしてしまいました。わたしは、「一番の友だちだったのになあ。」と思いました。そして、そうじの時には、言葉の教室に行っていました。そして、3学期に、わたしはひっこしをしました。今いるところは、学校は、人数が少なく、勉強がわかりやすい学校だと思っ  
ています。わたしは、今いるところがいいな  
あと思っ  
ています。そして、友だちもいっ

ばいいいるから、よかったなあと思います。そして、むこうの先生よりも、今の先生のほうがやさしくて、泣かない先生だからいいなあ。と思っています。木下川小学校へ通えてよかったなあと思います。

一九八八（昭和63）年度

二月一日（水）

きょうは、やきゅうのれんしゅうがありました。雨が、ちようどやんでいました。

「グラウンドがぬれていて、れんしゅうは、できないなあ。」

と、思いました。

そのとき、電話がきました。やきゅうのもだちが、

「きょう、やきゅうのれんしゅうあるよ。」

と、言ったので、ぼくは、  
「げっ」

と、言ってしまった。

いそいで、ユニホームに、きがえてれんし

ゆうに、いきました。

一九八九（平成1）年度

十二月二十日（水）

今日、お父さんにえんぴつをけずってもらった。ほうちようで、けずってくれた。はい皿を前において、かた手に、ほうちようを持ってもうかた方の手にえんぴつをもって、「シュツ、シュツ。」とけずっている。けずったかすははい皿の中に、いれておく。けずるのが速いからびっくりした。4Bのえんぴつを初めにけずってもらった。あともう一本けずってもらった。お父さんが「この木、かたいね。」と、いつていた。そして、2本やり終えると「まだあるのー。」とお父さんがいった。だから、ぼくは、「まだあるよ。あと2Bが2本。」といった。それからまた、「シュツシュツ。」とけずってから「やっとおわったー。」といつていた。うれしかった。



一つの花の感想

一つの花もそうだけれど戦争のことをかいた物語はどんな本をよんでもぼくが思うことはひさんで意味のないことをしているといつも思えます。だから戦争はぜったいにぜったいにしてはいけないと思います。それからこのころは食べ物などは配給せいだったのりでようがかぎられているのでおなががいっぱいにならないと思います。それなのにゆみ子のお父さんとお母さんはえらいと思います。自分たちの分もあまりないのにゆみ子にあげるなんてとてもやさしい人だと思います。ぼくがもしもお父さんかお母さんだったらぜったいできないことだと思います。それからゆみ子も十年の年月がすぎてからはいまままでよりかなりまずしくなったけれど家の中を明るくしてとてもえらくおつかいにいやともいわずに行きスキップをしながらよろこんでいって、そのこともえらく感じました。この物語を読

で一番思ったことは食べ物や着る物があつてとても幸福だということです。

一九九一（平成3）年度

### 持久走

五月十五日の水曜日、持久走の練習をしました。此本君と、ぼくと、美絵ちゃん、岡野さんと四人で、学校のうら門から走りました。走る前は（どんな道かな。）と思いました。わくわくしながら、走り続けました。みんな中の所で、ちよつと此本君におくれました。最後のラストスパートをしても、おいつきませんでした。

次は、全校練習をしました。全校練習では、四年、六年までやりました。ぼくは五番目ぐらいに走っていました。と中から、一気に二人ぬいて、三位になってそのままゴールしたのでうれしかったです。（このいきおいで本番もがんばりたいなと思

いました。）

いよいよ本番です。走る前、お父さんに、  
「ぼく、がんばるからね。」

と言ったら、お父さんは、  
「がんばれよ、やればできるぞ。」

と言ってくれました。ピストルの音と同時に、  
みんないっしよに、ドドドーとスタートしま  
した。ぼくは、いっしよけんめいトップ集  
団に向かって走りました。スツスツハツハツ  
ー息をしていたのが半分ぐらい走ったらのど  
がゼーゼーしてきたから、つばをのんだら少  
しなおったので、少しペースを上げました。  
ゴールに近づいてきたら、ラストスパートを  
かけてダッシュしました。きのう練習したか  
いがあったって、三位になりました。とてもうれ  
しかったです。お父さんに、  
「やればできるだろう。よくがんばれた  
よ。」  
とほめられました。

一九九二（平成4）年度

五月十八日（月）

今日、お母さんが台所で料理をしている所を見ていました。するとフライパンを使って、あげものをしていました。ごはんは、きのうたいてまだのこっているものです。お母さんが先に食べおわったので、5Fにいるお兄ちゃんをよぶと、お兄ちゃんが、「きもちわるい。」と、言ったので、わたしは、『せっかくお母さんが作ったのにもつたいないなあ。』と思いました。それでもお母さんはやさしいので、おかゆを作ってくれました。わたしも、大きくなったら、お母さんみたいになりたいなあと思いました。わたしは、いつもいつもお母さんがやさしいといいです。でもお母さんに、やっちゃいけない時は、注意してほしいなあと思いました。

一九九三（平成5）年度

タイムカプセル

一月十日（月）

今日、聖ちゃん、弘美ちゃん、ひさしぶりに遊びました。はじめは、うちで、バレーボールをしました。とつてもたのしかったです。

そして、聖ちゃんの家に行って、外で石をひろって、その石に、サインペンで絵を描きました。

そして、横十センチ、たて二センチの石に絵を書いてガチャガチャのカプセルに、その絵の書いてある石を入れて、そして、すこし大きめの石に三人で自分たちの、顔をかいて、それから、平たい石に友だち、二人（私のばあいは、聖ちゃん、弘ちゃん）に、メッセージを書いて、そして、その三つの石をタイムカプセルのように、土にうめることにしました。

聖ちゃんのうちの庭にうめました。

そして、地図を書いて、小学校を卒業するときに、ほりおこすことにしました。

私は、早く大きくなって、聖ちゃん、弘美ちゃんの、メッセーじなどを見たいです。でも、そのときまでおぼえているかが心配です。

一九九四（平成6）年度

お父さんのこと

ぼくのお父さんは、朝六時に、仕事に出かけます。ペンキをぬる仕事をしています。

暑い日、外で仕事をするのでたいへんだなと思います。この間、高校の教室のかべをぬっていました。「ぬってたら、ゆうゆう白書の歌が聞こえた。」とっていました。マンションや家もぬっています。

帰ってくると、顔や足にペンキが付いています。すぐお風呂に入ります。ブラシに石けんを付けてゴシゴシあらいます。先に、妹のもえこをあらって出して自分の体をあらいま

す。お父さんの好物は、よしのやの牛どんで  
す。たまにお母さんが買いにいけます。お父  
さんは、「ご飯をのこすな。」といえます。だ  
から、ぼくもだいきものこしません。  
お父さんは、もえこのことをとてもかわい  
がります。お父さんは、きびしいけど、仕事  
ねっしんです。

一九九五（平成7）年度

うれしかったこと

五月十六日（火）

私は、ある日、じゆくから帰ってきて、お  
母さんが横になって、こう言いました。  
「ちよつと頭がいたいから、ねさせてね。」  
と言ったので、私はお母さんが食よく出る  
ようにと初めてピラフを作ってみました。や  
さいたつぷりのピラフにしました。それで、  
食べたたら

「おいしいよ。初めてなのに、うまいよ。」  
と、やさしく言ってくれたので、とても私は  
うれしかったです。  
お父さんがかえってきて、食べてもらった  
ら、  
「すごいよ。」  
と言ってくれました。  
私は、これからもいっぱい料理を作ってい  
きたいと思っっています。それに、むずかしい  
料理と、デザートの作り方です。

一九九六（平成8）年度

おじいちゃんがきた

五時半ごろに、おじいちゃんがきました。

お母さんが

「おちや出してあげて。」

と言ったから、おちやのはっぱをきゆうすの  
中に入れて、おゆを入れて持って行きました。  
「デパート物語り」というのを見ていたら  
おじいちゃんが「みとこうもん」にかえよう  
としました。だけど、私はデパート物語りを



見たいから、リモコンでかえられないように電波が入るテレビの所をおかしたのはここで電波が入らないようにしました。それを見ていたら、おじいちゃんがビニールのハンマーでぶつてきました。だから、私もぶちました。兼太兄ちゃんが帰ってきて、二人でお見送りに行きました。最初に車のある所に行つて「バイバーイ。」と言つて、公園に行つたらおじいちゃんが「百円のアイス、四こ買いな。」と言つて、五百円くれました。

一九九七（平成9）年度

二月一日（日）

今日の朝、お父さんがぎんこうに行つて、ぼくは一人でまっていたら、急にお父さんから電話があつて、「つりに行くか？」と言つて、ぼくは「うん、行く。」と言つて、お父さんが「つり道具は。」と言つたから、ぼくは「ない。」と言つたら、お父さんが「それじゃ

あ、行けないね。」と言って電話を切りました。それから、つり具屋に行つて、いっぱいしかけを買つてついでに二千五十円のリールを買つて、つりをする場所まで行きました。と中ですごいごうかなせんとうに行きました。

一九九八（平成10）年度

十二月二十日

いつも通り中休みに外に出て遊びました。すると、未来君が一輪車に乗っていました。二年生も乗っていたのでかんたんかなあ、と思つてちよつとやってみました。でも、思ったより難しく、初めは一メートルくらいしかいきませんでした。三日間くらいたつて、五メートルくらいできるようになりました。その時は他ではないようなうれしさがありません。五メートル乗れるようになってからは、本気になつてやりました。乗っているうちにコツもわかつてきました。コツは、「しせいをよくする。一気にこごうとしない。サドルはし

っかりと、はなれないようにする。高さは足が伸びるくらい。」です。でも、十メートル乗れた所で、もう乗れませんでした。何回やってもできなかつたから一輪車をもうやめました。それから二週間くらいたちました。「久しぶりにやってみよう。」と思いました。するといっぱい乗れました。先生に急いで、「二十メートルくらいいったんじゃない。」と言いました。その日の放課後、空中乗りもできるようになりました。今はバックやアイドリング、などをやっています。

一九九九（平成11）年度

中川小学校の思い出

ぼくは、中川小学校から転校してきました。中川小学校は、四年間めんどろをみてくれました。いっしょに遊んだり、ゲームをしてくれたお友だちとはなれたから、とてもかなしいです。

それと、六年生を送る会に出たかったけど、

転校してきたから、この学校の六年生のことを思いたいと思いました。

中川小学校の思い出は運動会です。運動会では大だまころがし、玉入れ、リレー、竹とりなどがありました。この運動会で一番心に残っているのはリレーです。なぜなら、体育の時、一番好きなのは走ることで、運動会の徒競走で一位をとったからです。

でも、まだ、転校してきて三日目だけど、もう木下川小学校のいいところを見つけました。それは、みんながやさしいところです。木下川小学校に来て、よかったです。

茨城に行ったこと  
二〇〇〇（平成12）年度

一日に茨城のおばあちゃんの家に行きました。そして、茨城の家に着いたのが二時半くらいでした。やっぱり、おばあちゃんがむかえに来てくれました。おばあちゃんは「ずいぶん、早かったなあ。」と言いました。家の中

へ入ると、おじいちゃんがベッドから起きてきて、私達の方を見て、にこつとしました。私達もにこつと笑いました。それからおばあちゃんといっしょにうらの畑へ行ってキャベツとちんげん菜を取ってきました。そして、近所にダチョウがいるというのでおばあちゃんと自転車で見に行き、そのまま近くの店に行き買い物をしました。二日目は家にいてテレビを見ていました。三日めはおばあちゃんと洋服を買いに行きました。四日め、帰る時、なぜかおじいちゃんとおばあちゃんがさみしそうなのでちよっぴりつらかったです。あつという間の四日間でした。今度会う時は元気なおじいちゃんを見たいです。

#### 家族のこと

二〇〇一（平成13）年度

私の家族は、前いつもしーんとしていて何もしゃべりませんでした。ため息ばかりついていました。夕飯のときだっつつかれてい

てイライラしていました。ふうふゲンカをす  
るときもありました。なので、妹がぐずり出  
したときなんていつもお母さんはたたきまし  
た。

そういうのを見ていて、だんだんこの家族  
にいるのがイヤになってきたのですが、けっ  
こん記念日にあることをしました。それは、  
しゃしんやさんでみんなで写しんをとってか  
ざることでした。そうして、たんじょう日の  
ときもプレゼントをあげました。もしたら、  
とってもよろこんでだしめてもらいました。  
そして、

「ほんとにありがとう。」  
と、お母さんがいいました。

お父さんにもたんじょう日カードをあげま  
した。もしたら、お母さんみたいにギュッと  
だししめてくれました。そして、家族がいつ  
そう明るくなりました。

今もとっても明るいです。私は、ときどき、  
「私は世界で一番幸せな子どもだなあ。」

と思います。

二〇〇二（平成14）年度

### 革作り体験

四年生になって、初めて革作り体験をしました。皮革技術センターの宮沢さんといっしよに原皮から作りしました。原皮には毛がついていて、「どうやったらとれるのかな」と思いました。宮沢さんに聞いてみたら「薬を入れて溶かすんだよ。」と教えてくれました。センターからリヤカーに原皮と薬と排水の入れ物に乗せて、学校まで持っていきました。とても重かったです。皮が一枚で五キログラムもありました。体育館の前のせんたく機で十五分間回して、十五分たったらまた十五分回します。次に薬を入れて、毛を取りました。きれいに毛が取れました。センターに排水を届けました。分割や色づけ、バタ振り、張り皮をして、とても軽くなりました。色は緑と青と赤をたのみました。

完成した革でぼくは、さいふとカバンを作  
っています。さいふは青色で、カバンは赤に  
したいです。もしできたらさいふはお父さん  
にプレゼントして、お母さんにはカバンをプ  
レゼントしたいです。もう一つできたら、自  
分のポシェットを作りたいです。ポケットは  
三個付きで、一つは大きいものが入っても大  
じょうぶな大きさです。二つ目は小さい物を  
入れられるとても便利なポシェットを作りた  
いです。ポシェットを持って、遊びに行った

り、おじいちゃんとお  
ばあちゃんに見せてあ  
げたりしたいです。お  
祭りや旅行に行くとき  
にも使いたいです。今  
はカバンの設計図が完  
成して、形が取れたの  
で糸でぬうだけです。

